七家文製錦　惡　三

叢文類錄 三卷目錄

意部

始意 初字　通意 日　結意 二十　逢意 日　哭意 六
思意 八　見意 十　增意 十三　契意 日　恨意 日
思意 十六　切意 十七　悔意 二十　隔意 廿一　疑意 廿三
疑意 廿五　思〻意 廿六　幼意 日上　歌意 廿七　弱意 廿九
相意 日上　夕意 三十　夜意 廿一　素意 廿二　交意 廿三
秋意 廿七　冬意 日　離意 廿九

紫文製錦三巻

安藝　源　稲彦　撰

戀部

始言恋

物語世十ウ　源氏五十四

秋ぐさもいろいろかけてわすれがたきにぬぐきむさぶく
なくて。すぎぬる夫ぞかくて見んなるは。美女やとのゝ
思ひなしとなうえこゝろ高ぶまじけれ。ゑんしうとも
なよやかくぶんをゝくゝ人あへれば。女かやうなもなうゑ

たまはざりけるどもとうたてあだ心ゆかしどおかとうなる
さまにて。

袖の香をよそうるかうるをもうれはさへたうなく
なりも社すれ。むげにとおもひてうつぶしゐるまま。
いみじうなきうつきれつぶしとさくゐ法
身なりもぐつきれこまやかにうそくしげなるこなる
くるるのおもむろふこころもゐゆをでけはすに
おもふと同じくちゐをむける。

通書の表

二月廿五日

あそれなりの物がれなどやうてまぎらはしてをりく
云ともおなじんみしるぬべきわぶちゐて。
出うそうゐ法に似げなりしび。

待恋

幕本廿丁オ

いかぐおもへるとけしきを見がてゐ雪をうちをむ
法くまかぐなまをとわろくつめるれぐさを
ともおるを。日ひとおうゐみやけなんとおもう絵
へゐに。大かおろにかべにうむけなへたるきぬぐさ

あつまりたるおとこいなるまようちかけて。ゑきあぐべきもめくかるゑ。ゑぶうなどうちあげてぶうむばうりゆ。わうゐけうきうなり。

逢恋

著紫サセテウ いかづたばかるもけむいとわりなくて。見たてまつる社きへうぶくとはおぶくぬぐわむーきやうあさまあかるーゐおぶーいぶるだよ。我ぶくもゑ。ゐもゑおもゑなるとぶきてぐるよやうなんゆくうーうおぶーたるに。いとんうくて。いうーきぶ。愛をなるもゑう。

なるかーうらくたげにさりとてうちふけぶうろみうはばうーしげなるぶしもてなーなぶゑれなかん人よ似させあいゐをどなぶろなのあなるゐとだるようちほぼ見あはぎりゆもむとゆくーうさへぐいおぶさくなゐおぶとゆくは。同くゆくーあいむくーゐの山にやどりもゆくーまゐーけれどあやよくなるみどろ我にてあさましーうなるくなり。

源氏ハ 見んてもまくる逢我まてなる夢はちにやうくまぎ

侍ーわる身ともぶかれ。ゆむせかへるとゆきさるぶすぐに

いうしければ。
世がらに人やせうへんたぐもなくうきものとさわぬ
（蓬つま）
美にはなりてもいかもかしこだれしるさまもいとおろ
わりにかるでけなしく。命婦はきこえ。なかりしなごは。
かきあつめもてきたる。屋よりはしてなきねるわ
くしあるを川。
（花宴四十七）
○歌いろうふけてなんとさてけるとしたまかはく
あぐれ。紅葉賀かへるを思ぬれば。やうに笑ぬる
に。月いとあうきいでぬ。おうきを。源氏はきみ

ゐるむすぐちに。うすぐーがくおうくあるければ。人
の宮をくだうちやすきてかやうにおもむかはねるを
もしうぬべきをまもやあるに。美をかわうる。
里なうちのびてうかぐるもありけどかくぬべき戸に
もさしてげれば。うちなげきてなかあしどよ。微殿の
ほうどめよたちよりあへれば。こけくちあきたる。女五
はう人めにつぐみに。やかてまうのぐりあるまければ
人すくなくるけを。むなりおくれくるく戸もあきて。
おとものせば。やうにく。世中のあやまちにするぞ

かゝとおもふてやとりのゞさとてのゞきあり。八月九
日。
ゆゝしゝべしゝをわゝうおかしげなるゝふしなべてに
人とゝ同じ夜。あがろ月哀さ似るもめづらしきぞう
ちずゝてゞこなるときにくるもめづらいとうれしくてふと
袖をゆゝうへあり。女おろろしゝとちもへる事をいてあ
なむくゝいけ。おはたうゆのゆへゞなよろうぶくま
しきとゝく。

源氏夜

めづらき歌ゝ歌をもるもいる月はいがろけなゝね
ぬとゞおもふてやとりのゞきおろしゝく。戸はあ
たてゝ。あさまゝきにあきれたるさまいとおつゝし
うおかしげなり。わなくくさるよ人はとのゝへどま
源氏之月。
ろは皆人にゆるされたれどやすとうともなどう
さとろあゝむたゞあのゝてゝとのゝあゝあよおれ
ゝなりけりと同さゞめてゞきゝなゞさめろうゝ。
ゆゝおもへるもめゝなきけなくゝはくしうはゝてじ。
とおゝを動り。多ゝだゝちや例なゝゞりけむゆるさ
むゝとはくゝちゝきに女もわゝうたをやきてゞよき
ゝもゝねなるべゝらうたしゝと見ゆゝにうどなく

四ゆけばさてゝろあわゝでゝ女はまゝてさまでゝは思
ふこゝだしゝろけゝきたゝなゝのゝゝあへいゝで
うきさいゆべきかゝうぞやゝなんとゝさゝともおぞさしゝ
などのゝあへば。
（源氏春門）
（朧月夜）
うきゝ身世をやかてきゝなゝば忍ても草むゝゝをゝと
ゝゝとやかもゝゝどゝゝゝさきえんゝなゝまめきたゝゝとわ
ゝゝやきさゝしたゝゝへたゝゝもゝゝかな。
（源氏春門）
いゝゝゝしゝゝゝゝゝと寄ゝゝやゝゝりをわかむきゝゝ小姫ゝゝゝゝゝ
風も社ゝゝけゝわゝゝゝゝうおゝゝすゝとゝゝゝゝゝ

ゆめよりてまけて人ぐるまあるねぢさまかしぱま
てめぢ〳〵きかぜのあかぢといめぢいかでうはか
るかなる〳〵む。

明石 四十四ウ
○かはそのぐるあかねぢさまぢいかでへだけて月
ぐれ。あさきーきまでおもかはぢぢりかへーせのなるも
いねうめうなむ。

別 恋

第本 四十三ウオ
島もちばくなるぢ。ふあわでーくて

保氏 ウ
はれなきぢらみもてねぢ保員ぢ恋あねまで

おどろかすーむ、

夕貞 十二ウ
○夢ぢのとあるきあーぢたくうけるきれあむてあが
たびなるけーきるうちなげきつく出のあをゆ将ぢあも
ぢ〳〵みかりと間あげて見たてまけりおくりあへと
おぢーくぢきぢ恋むきやまとれば、ぢぐーもたげく見
ぢーあつ、茶裁ぢをくみぢれるるをすぎがてるやす
らむあるるきまぢげたるむなーらるれかるへおハするる。
本ねぢきぢぢねてもてまねる。ちをんきれをりにあねる。
うあまぢぢとあざやかるむきゆをるあーつぎハ

やかなるまめきたり。月かつ西にて。すこしれまのかう
らむ。ちぎり。えさ。すきあつ。うちとけたるも
てなし。かしこさ。かつばめ。きゝくもと見あり。
（伊勢物語）咲花のようにて。名ハたゝあどもそこてすぎうき
けさ。名ばかりぞ。いかで。すべきぶてるとゆゝ人あへれば。
のとかれて。ゆく。
（オハル本）朝ぎりに。れまも行ぬべけ。きいてゝ。花のこゝろ
ゆゆしめねとう見ん。とおややけどとにぐ同くなす。
（賢木七十ウ）○女もえゝろ。ゆゝ。よかゝ。名誉あハれなてなるあ

かれ見たてまゝ。ゆゝ。月かげ。ゆかとちなかゆゝ
わうにかむ。なぐ。わうき人こゝ。こゝ。あやもちもも
ゆゝ。
（総角五十二ウ）○わうきくれ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。
あさげ。すぐ。ゆゝ。名誉。まわる。ゆゝ。
香なぐ。人。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。
かゝ。
（宿木廿五ウ）○ゆゝ。ゆゝ。見。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。
まくゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。

ぎてころかりけるぞやわれかなどうかもちゐ侍。

帰京

孫子五十首

孫子のやうにてくうごきもしあひだなくこれもと
きゝぬべなびきやうにて霧はれぬるもあるときにはうぎ
動かずうちはれるまゝもとへ人にあてむがはづしまし
にえはまゝもまたをすべかめれバ人やすきにはるゆく
ていうぎのでするなりけりこれもわど人やまもなく
ずこころがろくあるむにてくるに変れはしきがうと
うくもまてまぎろかりけり。

夕暮

暮ゆくそむすぐるゆくれもろうかきくるとあるゆ
かれし。

堂七十首

○すきくしきやうなれバるこまむとあるぞのきれ事
もくらしさにぬれしく秋ゆくくゆくをぬぐとぎにな
ぜとかなくぐ嘆けむかしうきけれバえくろ同もとぐ
めれ。

若葉下六十五十首

○ぬくくあれわくくちかしげなるを同きにやうにくぐいで
あるたまくれはまとにをはなれてやまをぬ侍
さくちに。

○ぬるとてねさきに人々あはぶきおどろかしきこゆつ
まぶるもろわもにねておちてえいでやとあはぶ。
世いもうびまどろめべきかしさきにうれ川もうちもか
きくくしたく。女もかぎりなく。哀とおもふけり。
涙をもうぶなき袖にせきかねていくよ別をまむ
べき身ぞ。風はいかもどあらまうう。れのき曉よ。
おのがさぬくもやかるなりたるさらちくぶる
にのりみかどらかつすやうにあさまりけれどばと
もれ人こいをたつみれまくいを思むくたぶいうがし
にいうがいづまだわれにもあぶでつぐあもぬ。

見意

おかぐは。姫君はかにおりまをかどにかまりの表
まわりみたて。東はまぶのたざうしめうこうたて
まぶはあきたるむまを何んなく見ゆしれ女べるよ女
房あまこ見ゆれだちぶまのてだおぶもぶぐ見る。
れば屏風もかぜのつうみきけれだおりたくこうせうる。
見ぶ。あくさなる意さしはきまにわるまへる意はと。
もはまぶるへくもあぶだぶうくさうにさとうちに

ゆふさ〳〵ちらでまぬあけぞのこゝろぬきまうあもし
ろきかばざくらぬ咲うぶれたるを見るさくらびあ
ちきなくぬ春るわがかほよもうゆ見くるやうにあい
ぎやうはよわゆむちりてまさなくめだらしきをとの
れゝさまなりみびのよきあげるるを人こゝおさへゝい
かよちるにうあんうちわゝゆあへるゝといゝうう
ぬゆ花どもをんぐるゝかりてえ見すてゝいをあゝび
おぬへなる人ゝもゝさきぐるもゆきよげなるすゝども
はぬわゝさるれどめうけるべくもあゝびあをでめいを

けどゆくはるかなるもてなしあつるはかく見る人たゞ
にいえおもよまゞきゆありさまをゝうゝあるきゆこゝろ
よてもしかるゝともやとおがびなうけるをおもよけ
ちをゆおうゝしくてたちさるにゝゝめゆあらう
ちれゆさうしゆきあけてわゝうあゝ
○みゞかきゆ水丁ゆきよせてさはるぬゆる袖ぐちハ
さにゝうあゝあゝとおもよむねつゞくとなるゝちす
はもうゝてあしゞゆ外ざまにぬやりた。
若菜上一百三十九
○弟門獨ハいゝゝゝ思ゝをちりてやゝもすれば。

花ぬ木にめをそけてなどあやぶ、大ねはらてろ〜見
にあやしかりけるうしひのすさかげかもむつぼるとや
あるむとおもふ。

○宰相ぬさこはよろぼのつゐをもとさくたぎ〜び
おがくぬもぬくゑまうりがのつよもろれと見なりを
ゑにもわろむかしまうりぬんざーぬちろーあるべきよやと
紫うれ〜さまろぬちーてあるずぬ〜ちおがゆ。

○うぬあうりぬ花のゑをゑんてやなぐさむとおもむ
てまゐりたまふ。

○十一

○まさやるよわがんにもいとけーかうねおとなればけぢ
かく中く心ゑみだるくとも。まさるべさいとやるくは
心ひもうぐ〜たぐいとかけるるぬるぬつまばかりをう
たくまけうーき基ぬゆふべのあかびるとともにおもむ
いでるしのよはありさまをずうーけぢかくて見なく
まけうりおもよさとも。何くちうせてはゑとくだ。れ
はかつりなぐもやるんせうまゑ。あそれとやかぢーあ
はけうぐおもゑけるる。

○わろぎうもゑ孫あつりけれはろなうにあしーかれある

どに。実はかくずゝありき。あをてゝすれうこにれい
なゝぬわゝはぬ。ぬんとせるを。今まゐりぬあかなどか
かしてゝさゝめづきあかりぬがどなるさびしぬそ
あに。あきたるより見あへばさびしぬあなたよ。一尺バ
かりゐをきけて。屏風たてたりうれつ戸いぬ下
すゑう人くたくゝうりがゝゐむとへとうちかせそ
をんなけ。花やうなるにをゝなへしけ。ありもけと見
ゆるかさなりて。袖にさしいでたり屏風のゐもゐう
たくまれるうりんにもあゝで見ゆるながゝいまく

わりぬ。くちをゝかゝねなりとおがゝてゝさけゐき
ゝにかゝよさびしをいとみそゝおゝあけあをて。
やをうあゆをうあゆをうあゆ人あゝび。

増意

葵 四十八ウオ
よざ石あれとかも。ゐきとけるかゝ。ゝかゝ。ゝまあう
ざりけり。ゐとけとゝうゝうたてあるもけ。あし。今ハ
ゐと最もへだてむさとけ。わりなるべきさゆくおか
さる。

口 四十九ウオ
○がくてけちいうちにも院にもあかゝきまるまゐり

たまへるかぜぐるまのあげんなく。おもかげにこゑしけ
れば。あやしれきろやとわれなどゝかがる。

（ねつぼ十七オウ）
恋

朔月ゆゑれさとくさにねをなくべえぐをかはさむと。
ちぎりてせあるこゑ。かなしざりける人をれかどぐ。ぢき
せびくゝあーき。

（夕貞世一オウ）
○長生殿れあるきたかーはゆくゝくてねをかいさん
ゆゑは記さかへて。孫勒れ世をぐかゆあ。

恨恋

（賢木六オウ）
月もいりぬるよやあいれなるゝとなどあつくゝてき
きくゝまよきくゝらおもむあはあたまへるつくきさく
ねべし。

（明石四十二オウ）
○うちすてゐへる恨れやゝくなきに。面新ゝもてわ
すれかぐきるだけきてくは。きでなゝぐにあばあり。

（標濃十三オウ）
○あれれなしゆゑべれけゝゝ部ーたとなぐまかな
らるどゝれよのかくちぼれゝゝ。おとれ孫のなまあき
たゝーも。すべてくんとまれゝさまるのくまをいばるよも。
われいまくなくゝゝがなーぬおもむなげきゝーゝす

師云。この下にと
れ二字ぬ今ゝむとつあ
しゝ歌ゝゝ久八図
し書。濃物多。新
分くハいれどゝゝ。

さむさもてもんをわけあるけむよりは。たづなくび。おもむ
ちぐけんれてゐれいわれ。やうちろむきながあてあハ
しなるーせれさまかなぢをむとりどとれやうたらちな
げきて。

紫上

ふつゝどちなるむくかるとい。あゝびともわれづけづりに
さきたちなまゝだるとかやちろうや。

源氏君

惟ほるり世を海山を行めぐりたしぬ涙ようき
ちびむ才ぞ。いてやいるぐゝ見て年ゝむ。命ろうか
なるかるとうべいもれなあれ。ちろなきことにて。ゐ

ん。おかれ。ゐ。おもふ。たづむとにそゆあづやとて。さう
れ。ゐるるむきさみせくかきあハせすさぐるあて。ろれば。
きてゝあんどかれすぐれたりけむもねたきにやゝまもふ
れあんび。ゐるかほろて。うたくうたをやぎあつる
もれかゝ。さすづにちねきやゝろはきて。れるむ
ゝもろまつるがなろくあいぎやうづきて。ちたちな
ちあみをゝ。ちゝう見やゝろありとおづて。

榻ナーテオ

○さすづにまかりまゐはるきおくあゝ。女ゐれうやのな
やまゝくちみゝなるゝ。やゝゝむきゝてになんとて。そ

いねゐ人へれば。凡とやとゐんば。わるざこともてあそぶまぎ〳〵はおをすりうばあれたぐなゝぬをあやーくけ（源氏五十四）
けーきれかハ仏るゝろかなづこもなーや。あかややき亦。
あまりあなしぐてなくいあざさるくゝみやとて。ぐたてあ
くを。まこいぐなぜきてゐへば。なしんゐくゝろげよ（紫上十四）
うきまれかおかりけれとばかりまてうちうむきてふ
くゐつる。凡すてくいでゐへうちあうけれど。こやに
ばせうこ同くゐあてければ。出ゐぬ。
（夕霧六十七丁オ）
○なゝこるるばぶともぬざあうて。ゝろとなく式

やうかさゐてだきしめゐむめでたうけくろ。ゐけきこしてで
ゐゝをかかげる見ゝぶーて。おれむがさくなゝこの出
くれぬぎやあるゝ。ゐとれ袖をゐきこせく。
（玉井ノ十八丁）
なゝく分をうゝみんゝ。れもれあまれゝるもゝ
ゝちやかへまー。
（宿木五十七丁ウ）
○やいゝなくおくまゝるゐもゝをけくくてすれゐさゝう。
木丁をすゝおいれて。倒れなきくーげよちゝづき
ゝうゐあがとくゐゐければ。わゝなくゝもあがーて。おれれ
きみといゐ人をちかからあーゝせて。ゐゐなんいゝきぶい

おさへてとのまをさてあるをてもの〇いおさへたるハくる
しう侍るもれをとうちなげさてゐなかりあるおど
もげまうちやすらねゝ。

思ふ

（北分ハ十オ）
ゑとゞゝれいとまめやかなれバにげなさをおもむきう
孫どきやうなゝむ人をそうがなごうハをてあと
くゝさめかきりあゝむいのちもかどもいまをしハ。
かなゝびのゑなんかゝどおもゑはゞけゝる。
〇ロウ
あやゝくあくがれゝるゝちゝて何とゞやま

（十六）

たわゞんは思ゑむくはゝれるよゝおもゑいづしをいを
にげなさをとなりけゞあなもれるをとゞをきま
からきまをおもゑはゞゝ

切ふ

（葉本四十五ウ 源氏ハ文をふみ書きなる）
乃至 あゝをとゝもてきたるハ女あさまゝきに泪もいでき侍。
出云のすゝ小云ハうゝさゝの木ゝ
おれるのおもあゝむとゝもはゝるなくてさすゝにハン
あゝをとゝおもゞかくゝに云ろゞゝうゞとおかくて。
（源氏云）
乃至 爰をあゝまゝありやとなゞくまをあゝあハゞゞ
ゝうもへまるゞゝ歌なけしバなゞゞあもおまを侍

かさざきに。あもきりそだちろくしぬすくせうちろへ。を。
ゐ。を。ゐ。ゐ。ゐ

を。見やぐむ。人もやあるむとわぢらんきも。女の
ぢらあれいとうきぐかーなやまげよ同わるぢ
おもちぶをわりなりけるいとぼづとぶむ。ゆり
ぢるこれもるにおくハんぐるく見てもやミ
ゆるかれもいはれをこぶまれらろやとおもへどなさ
けなくむこをぼなれいとほいなるべーぎたち
まちれわぐころれこだれよまかせてあなぐちなぢ
さろをぢるむてのちころやすくもえあぐ
らむもれくわなくおれどもあかむおどもさくろ

ぢくに。女れかくぐおがくだれんとよなぢさろし
くもものよせかれば。いまのまも。意きぞうるれり
けるざくに見でハえあるまぐおがくもかへすぐ
あやにくなるころなりやむくりハすくうう
やぎくあてるらうたげなりちるけを。なとハを
ちはなれたるともおがくに。身にうゑるこちして。
さくくにおもくもおがくずなりたり。
ほ永世三年ウ白文汁
○さくろくりほろにえ見ざくむおどハれれ。見ぬへる
ゆていとおくしげなる男女。もろともにうむぐる

かうこをかきあつめて。ぢにかくてあるばやなどのやうにも。なるらむおもしろ。

白文
なるき世ばなのあそも枯かのしきはこゞあすきゝぬ
いのちなりけり。いとかうふかうゆゝしけれんゝ
をもきゝにえまかせずゝろぼるたゞゝむやどまと
に。ちゐぐくなんおぢゆがぢゝかりしにあるきまでなる
なる。なふいたづらけんなどのつまも。女めしたまる
ふてをゝりて。

俳句
おゝろをばなげきゝまゝ命ぢきゝるあなき世い

もいまゝかば。とあるをかゝむ弘ばうゝあう男の歌
かりけりと見なるつまゝとらうたゝ。

悔恨

柏木ニ下オ
おゝろぐ心方。おぼゝなげくきまをんゝてまはるゝ。ちゐ
くかけはなしふかん命かむなゝ。ぢゝちもかゞゞきことをか
もふ。おゝろはふをしてゝまゝあながちにさ世にえなしゝる
くをゝきゝとゝでめまはゝきゝ者かは。いはけなかりゝほどよ
ひ。ふふんことにゝく。行ゝをを人よ。今ゝもときゝまゝ人
とゝおほやけわゝくゝ。ぢにふしなゝおめなゝ。ぢゝふゝ

ぶりーかどろめいろかなむがくかりけりやいとしみる
ほのめーごとに身をおもむいてこなーなへてめよの
なるすぎまーうふむなりて後の世のおこなむよいふ
かくすこしーおやたちれうーーをふえて野山も
あくがれんちめおもきほーなるべくおぼしーかばと
ざまかうざまにまきーほーけるを法えに粧
を世にちまみべくもおぼーぬもれふえめをかーなーで
身にうむにるーわれるほるだれかつーきーろ
ぼーらもてるーなむをけるいーうあなしとおもふよう

うくも世よふよもあ
めかなハぬらだれち
を世のれなーぬミ
に。

武世のミおーぶり
になれとハむとれ
ふむよーうをなう
ゆり。

らむへき人なーゆ神仏をもかーむかーなきいたれ
えれさるべきにーうあーめれもちとめれれなーぬよ
はづむにとまるべきよもあーぬをかくむとよすた
うちあめぞれわべきかとこてなけれ武をもかけあよ
人あーんをーうはゆむをほふるよもーぬるもるーみは
せめぜめくなぐーへいおのぼぐーあるまぐきーをもた
ちわしも人もやすーるぬーだれいでくるやうもあん
ふりはなあーいとちいーろかいなへーーむあーにもさう
ともおぐーゆるいてんかーふろぼのこといまはのを

ちゆよ。こなきてぬぎわざなりまことさまぬあや
まちなゆれば。どうもけそうもけどまたん
しなくもあてかけあもれもいできなんふこを
れつまよ。思をけぐるもうちかつとあぢきな
なぶかくわどもなくもなすけるみなくむとかさくら
しもをみぐれてまくもうきぬだろう人やな
らびなぐうへけ。さくうをまあるとて人こうさう
あるわどこ。かこれめこなれあ。

蘭 丞

ちがなるなりあ。てのちはあくやうよ。この
ちにもいれあたびあるのをりくはかふは
移よきつかうれ。かはなるはこ忍をなぐさめてう
ちずくをのこゆ。かけまうかはくあ。
紅葉賀二十ノ本 源氏のさまこ
○今日はまこと。にも見てまよかあ。ねがもあはくよ。
ゆくきまでなりまりあふはありきまかれと人く
あて同ゆを。家はは本下れ記まう。かけ見あふは
はけくも。おもかはとあげかけり。
口 廿二十ノ本
○まてわなきれころよはこてめうちもあもも

やらしねくいもぐいおぐるまなきさくちーあつぐろ
ぐ〜きまでなん。
（源氏五）つきもせぬんけやおやくくるかをあるる人をうる
けけてもとのこ記とりごてれつもけとこ記なり。

隠 亥

（草本廿五丁ウ）
○さろうきおもやあくんをもあ〜びんにを忘れずなが
らせうそうこなどをせでひきーく伝りーるむげるおもひを
ずしてんほろかりたれいがきおきもけおどもありしに
おもえわぼ〜えてかでーこれ紫をとりて。（夕良のとりく）おこせてう

（源氏五四）ちりをぐにすをぐ
とぐろふさ

しとて同ぐみたり。（源氏五四）さてうのふこけをばとをふふえあ
へはいざやことなることもなかりきや。
（夕良の）やまぐ先のかきほあるをもりくに記ハかけまなで
しこけ家ぐもえいでーまこにまかりたりーろば例け
（夕良のさまこ）
うるもなきもけうぐいを掛おもむがほよてあれたるい
へけ家ーげきをかがかめてむーけねにきほつけーきむ
かーもけぐりめきてーおぼく伝りー。
（以外ね）さききーる花ハいつれとわかねどもかほをこなれる
ちくもけぐなきやまをなでーこをばさーいきてまぐちり

さぐしにとおやけこころをとる。

うちはらふ（夕貌）ようでも寄けき森夏にあしふかさうゑ林も

きにゆかわとはくなげよいなんなーてまめくーくらーみたる

さまもんてびなこらぶをもらーいもーてもいとこぼーく

ほくまーげまざーこはーかくーてぼーきをもたもひたる

ア八もとんてんをわりなくくるーき物をおもひうる

しろいこころやすくてまこぶーこおさ侍りーほどよ。

（夕貌のく）ゆもかくこころがきこゆりてうせいーうえく

鏡恋

ゆ為はたくひまぶ。さびかるがやくばうりこまもろ

おーせにーきあやをたちかさねたるやうそーよは

よせつよにうちなれるさちーてへくせすぶとも。

なんぞみたるうちまーつとなどーていを為げるこま

はさる為はなるうなるう寄いろどもよなぶーこ

せかうなるかさよてうちみだれをへるれんさまなよ

ぶとも。いとうはけーくさいどくーきまでさかりなる

をとれいようむなるくれよおもをむくらぶしどゆ

おとりてもおぶくーびなつかーういあかーきはさろ（ざ）

めおろかなるぬよさだちなきなあつかーまろはう
くしくさくみつ一人めすこかろやきたるは
をいふくもろうなりてあてるおうしげなりうかろ
ろうたりまいなぶいちるるぬをるこにあいぎ
やうづきらうたきとろをめなか人はおかく
まきりておぶさるきにいぶれをうかるなどよ
あるぬ人めげちかくいむるをてとにあれつまの
だくるぬけをむをもきて見なれんいうでうだ
るはおもきむかたるしもるおもをるぬぎきとな
ると。ふたわがいとくまなきがこうろなるるおうし
あるるれいつもまこうろとかけてあうきさまなる女
などやあるとちうきうぞーさかるむつなどやうめも
めをもさうげなくてさかるあへどさるめかなだで
いと甘くうるにてなるおくしきなどうがをなけれ
ど。拙まとうまぜなどてもあるをあるーなないと
かくめくさはあじどうとうたがはるるいとけは
やすうるびおかさるくさとやうなかーかめ人のけ
しきるこうろあんん女めあとれとうもぬぎきとな

やてうはさいとれふくはさ〳〵はなるらむしとときあ
ゝをなれはかくこゝにぐちもゑかをすゝしかゝや
ちもゑやうぐわもじくばうたぐゝわるかりける。

雜部 元亨

せかをすす
中ねよもすぐゝあゝきかせれきにぐすろる物
ゝ元なりゝにかけそゑゝと、ちもかゝんれにとは
さゝおかれてあゝほるにおもうげれわすゝし物を。
さいはいゝよちぐゆゝろゝぐあるまぐきさいとゝこ
ぢゝゝゝゝをまぎゝはゝとくゝにちもゑうほれ

どなかゝをちぐゝにきゝかゝ行すゑありがゝう
もゝ物ゝゝゝゝけゝかな。

過門恋

花交里二丁ウ
なゝ河れかぐちはするにさやうなる家れゝだち
なゝぐゝゝばゝるゝくなるをあつまるゝゝべく。
かきあゝせにぎはゝゝゝゝゝきなゝゝゝなゝにゝゝ
まりてかぐちなるゝゝゝゝなれはすゝゝゝいで。
人いれゝへばちかきなるかたゝれゝのちゑ風。
まけりのゝゝちぐゝいでゝれてゝこはるゝゝなく

けさをいかしきとだに云はあるしやどりなり。
ゆくゑも出なつるたづなりとへよけるをちが
めくくやとはくまゝはれどすぎがてゝやすらひ
ゐるとそうしもうとくぎひなきてわるるかりの
きこえしがほなれば思ふ人あしかへさをあるて例のこ
きこゝをいとしたまふ。

（ほ氏云）をちかつえぶ思ふれぬ時ゐるかれなるをー
宿めりきゆる。

幼意

（源氏五十七）おかしかりける人めなどうれしくゐとりゐたし
はくあたまつり田たろうちかゆれどもておきてふ
こやはたまつるかくべきをれもしいなるれば年
うちちきはすぎゐるまつりおかしきゐなどを
やはなる。

（紅葉賀十九十ウ）○乃ぐれいとあでたくこがれかるはたるかかきなで
てかうなるかどは。ゐしくやあるとのこまへばうな

（ほ氏のく）（葵上の）

ぢきたまる。

（葵四十四ウ）○ちゐさ池が本丁ゐきあげてゐ入りゐへばうちろ

だうでさぶらむ。つれづれまぎれぬべきことなり。かげ
はなれがたくあかしつくさなどたづねんにぞ。同じる
人はなれまゐたるよはなくもなりゆくかなと見あま
いとうらゝ。
少女巻ノ四十九
○意しとはおかしなんやとのゐべがすゝうなづき
あはさきもをさるべからず。

題意

為業下八十二オ
まぎれ羽すぐしはかどよわうるあハむとくやくちきあ
よべはかハりをおもてこれ風ゆるくはありなしとて

御扇はいきあむくさはうたねもあつかまれ
うつりをたちとまりて見あまにはしとねはすこしまよえ
るをまゐあさこどりはやうるるえの枝きたる
はしゐんゆるをなるうろなくむきいでぶくんずるに
をとさはるなりかるはなどとゐんにとさうあさて
うかさはきなりあさかねにはきぐとかきたるをえあふに
まきるべきかなくうはむとのゐなりうとと見るひつハ
ロ下八十三ウオ
○おとどはいかゝはなほあやしくちばさるハひとと見あ
方にくうちかつしそ見まふさぬらん人はかうはかは

中納言よりはなるてしたかきたるかとまでおぼしこがれ
ことばづかもきこえとまがうぐくもあるぬとどもあり近
をへくあもむわろけるとはいまはうにかいいかなむてん
やいうぬすぢをかきたくたるとばいと見どころあり
て気なれどいとかくさやうにかくべしやあるべき人はあま
をうちかむやうなかきけまちちこうとかうと
ちもむしうばむうにかやうにうるべをうかし
にもかとうぎたくまぎいしかあうむとはあるきようい
むかうきわざなうるとかは人はんをさ見ちとしたま

むい。
○いとあさましくいたのかどをあうことといできけむかくるとは
はあるれいおれだうけきにてもをさいたるやうもや
や心むしたるいとたくまくもあるつきたるやうるに
がてしばまてさばうたるみくもあるさ見ることど
もは見あむてけむたぎくかるけなくがいうきき
に羽ゆすぐこもなきうるなどあもちむうこちし
ていえんかうなくおがゆ。

尋恋

（紫世ロ十ウ）枕はゆめべいまてんぬいときなくのこゑあがるみだれ
ゑとのかあらうに。ふをうけてあなぐちなるゆうもたづ
ねまゐりこんもまさうあるべし。

朝意

（紫ロ十ウ）いやちはもてかすむあをとうぐちなうゐをた
ぼしいでいかどうちたゝかせゐへどきくさくさくさ人もなし。
かゐなくてゐにともにこゑあるへしてうこいをゐ。

（保氏元）あさゐゝけきうたつうらはまきにもゆきうどかゝきき
いもがかどうなとあうかゝうとうゐるこゑばうとうゐ

もぢうゐをうぶゝく。
たちどまりまうはまぐきのすぎうくばくさはをぎゝにさ
はりしもせゝといゐむうけていうをぬまゝ人もいでこゐばゝかへ
るもなさけなはきどゐはゆくうゝはゝなくてを
のへおりゝね。

（夕蓬十五ウ　夕きうの月）○あさまゝやゝとあうがわゝゐはけたん。あさあはを
もゐむはうゝなゐゐはゝうばゝちゐれを

夕　意

（万葉下ハ十ウ）すゝゝはかとはこもをうにはゝゝ日ゝゝはをはたやうを

夕顔がほなどく。月まちて。いませうぞ。せこうけまいもうん。

くにぬどろさうあむて。さうばちたどくしかうぬかどこいと
くれうなどたてまつりなほす。月まちともいつかなるもす
をといとわろやうなるさまーてのこまかいにくかうびうし。
うけまにもとやおぼすとんぐるみおぼしくたちどま
ゆつ
ゆつゆ袖ぬうせとや日ぐしけなくときくあこ
てゆくんかうこなりなるがんふまかやくいむつくるも。
らうたけきいぬいわくあれくるーやとうちなげきぬぶ。
まいさともいうきくんかうぐるふさわうぐ日ぐし

けさ者、などおがりーやすうむてだなふるさけなくもも。
んぐうしけれいわ。たまりうむぬ。
○むぐうしけあうにおどろきて。山けかげいうまきうぬうが
うぬうんあさまーや。今日さけいかうぬうとそうにいて
ほしうてたうぐもうびかほう。祝かーすりて。うにおーても
にうやうなさんとなかあおえて。

夜恵

けうけうくにうねあむてだんけうちはいと。
恵うおがーやうくしけうちうあて。とる物

ものくまたいに。

○樫（十六丁オ）もいとよけゆくよ。風もけさをこそけしくくとまさ
るよ。いかもめんがるくおだしいさまらさかどとぶ
しぬるを。

（源氏五）はしかなさをむうにさうぬふうう人めつくさる
うへうつゆし。

○（徐角十三丁オ）ゑんよくきかどなるかいげよがぐめこがしかをた
るを。かきやるをけくるこまへば人めはけをむあもやう
よかをりかりげなり。

○（ロ オ七丁オ）火めかのうなるに。うちきすくこにて。いとなかるよ
本丁めるをゑ。ゑ。ゑ。をさあげてうめるどいうういと
ゑしくゑ。

○（ロ 廿九丁ウ）いとをしきあめあるよめ。ゆさあて。夜よめあしよ。
心をめうちして。あてかねるめれいのあけゆく
空をゑゑよ。かゑのきりなどきこゆ。

○（ほ舟 ロ十八丁オ）くれく月いとあて。空のめうどおもいぜる
涙めいとどけうあどさいとけしかうぬこうろかな
とおもよ。

（六十九丁オ）
○秋はいとくゝかけゆくさまはものとりめすれば大ぜ
たゝび人〻おもむきけなどすれに弓ゐきなりしあ
やしきものこゝろもしてゆくあやうしなどいと
もいとんあわゝしけれはかつるゝかどいへはさら
なり、

白文
いはぐるまの月をハすてんと白きれかゝらぬ山なく
なくゆくさゝばをやとくゝ山人をゝしぬよ。

去来

（竹門十八丁ウ）
ゆゝぶれは。義のまさしかやうなるねどをくゝと

（廿三丁オ）
ゆくくるまにこゝろあやもうれと見わきつゝけ
ちなんこゝろもかゝるこゝろ見きりゝく自ゐおろくこゝ
ろをいゝぶゝことさきになるぬちんことわゐくゝち
もゐまさる。

（ほ丹廿三丁オ）
○れいはくゝしがとくゝかけるゝかひとなる俤
ゝるゝれゆけはわゐくゝのこゝおかゝいるゝ人ゝ
記れたくゝまちてゝとはるなゝ蕎ぬまきるゝと
なくのどけきまれ白よ見ねどもくゝあゝぶゝのさ
ゆゝぶと見ゆるくゝまなゝおいきやうゝきぶゝつかゝ

（廿三丁ウ）
くゝるゝきんゝ

くちうげなり。

夏 恋

蛍 六十オ

なつくさのかとごとなげきけり〳〵きてくるものともかぐ〳〵

やうゝ夜にぬりたまゑくれきてぬるゑをゑとへうち

かけかのあたにあを女くさをむかるもんしろくをさゝ出る

るかをあきれるぼるをうすきかるにひゆはきくと

おほくきくこゝおきくゑむりをきくこゝかくゝゝのゝとゝをき

ゑげなくをかくむきをくゝゝやうにくゝゝはるゝかくけちえ

むゑむゝゝゝにあきまくてあゝきをさゝかくゝゝゝのゝゝゝう

恋歌は女てゝをおもひよるをゝさゝかゝゝくゝのゝ

たゝくゝゝあゝいとおくゝゝげなり。

○氷を（拾遺 世ハ十ウ）もゝくゝゝゝおきてゝわゝとてもてさわゝ人く

おとなゝ三人ゝゝゝゝわゝはとゝゝゝゝかゝゝゝゝゝもゝかゝゝ

もきゝゝゝゝうちをけゝれゝゝゝゝゝ

必ず無心無欲なるべきなり。人とあらそひむしぶる
似るべくもあらざりけりとおぼゆ。まことにたなどは
まことにたなどはこそちがすれば。ふる記をばぐく
れば。きなるすぐれ記とへうれいろなる学きた
る人は。自らちがるなぶるようあんをや
とおもと見てなるべく相あはるべきとくらべな
ば。たくさまざまかへりみへかしとてわるるまきあ
いぎやうづきたり。寄きくまぶこれらうきれ
人とはちがめるべくわりてよとよもきり。

かうらようちおきむものきーあそなどきまあう
する人もあるべしられ人がうはくこてがまへにもか
くてまわるせたれいとうはくきれ多ばさや正
もむてのどんせるよいなもたるじ。おはくむづくと
のなよ教へいとやはる同もかざりなくうわまざ
いとちむさくおもーまーかどる。音も相はあろ
もちろでは。見なまりー時かでたはちごのはきまや。
見ーてまはそうーうはたくおれば。寄を記と
るよきるざうはるもはをいろなる神仏はもくらを

ヨ。凡せまつるなるむ。れいけやすらび。拍おもい花
ゆすりまやあんとかはいちぼんなくてまもりた
ちるるかとる。〜
口（四十二丁オ）女文はいかるらいおかげなるハ。れまう
かなるびまさるべきとかはとなるなるさる似
みえびるるあるけれあさまきまであてまかと
ヨ。ちも、いえざるはさ海かるかるへハ忘なるど
ヨかるるとおびていとあつるやあれまうすき
はるうまれ。女い例なるねもはきたるるる時くる

（世五）

はなくおかしけれとてあなるに為りて大貳ヨ。
もはく。ゑとへはれはるねえてまわれといへをのるまま
れ（オ）おなるへいはれはるとちはいるきさかりよかは
ますれもてもやゝ家くなをかるうおもつれい
はれ孫んずるよわるはるよおそなどして記る
はるとわるるあへれはのあへるはるは本てようちか
けるりなるるはきるね人おるく見る時なんず
きたるもはきたるはだるるくるおがゆたるる今ハ
あへなんとてるはるるきせきりるよはるはるまもき

のれおなごくれなるなりばぐれおかさすうな
どばさおとうあそねどなかさぬくなるやいうべく
もあるべ。わかりて人うまわるせうをとうて記とつ
きうなぶこしあるよ。んそうちも坊ー。絵うきて。
しき人見る人はなくやはあうゆるきーてあれは
なぐさめんさにげなるあかどうかーとおもへど。
明日かやうにてわれまぐるんまるせてんを
らまーかばとおぐゆるんまもあるべ。うちるゆれ
ぬ。

秋恋

総角 廿九丁オ

あはれをぐーいうもあるべ。秋の夜なれどかどもなく
ものわるさうちーていつれをわくべくもあるべ。なまあう
しきは家をそ人やうなるべ。あるべさうにて
主
宿木 卅三丁オ
○風すぐーく。ちうるれ点おうは沢なるよ。いまあし
きるすぐこあるがんなればいわぐーくえんなるよ。
もれおもーき人れがこうのうちばうばるよ。も
のえうきっとのこう。ゆかうりけう。えぐーとのなく

忘て七ねちのくなけはが若木の梅の下にあまたぶつ手る。

ふるにもやうれかはかげのこゑしらて

（本歌）はかりふるにきうまもめぬ月ぐしはあうしは

きれのくれるるかさいるむぶまはゆあるが出みなり。

はかさ北のふるとふかくなるまに延もたうするざう

ひになるもわれなぐうにくきんかるとはよく

同ふるつり。

冬ゝ恋

（サミ丁ウ）樫

むふ人れはもめぐうに。夜ふけゆく。月いとくすゝ

てちぢゝ。はしろし、（紫上）女房

ふとぶしいまれあハめなゝ寒すし月のかげう

かがゝとゝ見人ぐしてすこうかしあきあるほどに物

なくうそくげなりかんぐしちもやうめこひきこゆるむと

の面かげよとちぼくめでたれはいさてうわくれふも。

よりかへしにそべしなれはうちかきたるに

（侍従）かきたやくむうこゝ恋しき書もよに気どうるそ

れうきぬう。

（夫木抄十に千オ小方）

○たちはきまりあ記てもかんれ外なんはゆくる

うゝうあるべけれぬるに人もうぐそおこせあはず。

袖は氷もとけるんかーなどなこやそ、えわこま
へる、

○大将記（信子世ロイウ）

出ぬつゝまこゝろぬけやうくにもるゞ昼は光るおかく
しきをやらはあやゝとおゞゆゆ自元ありさまま
て、衣かゝーきさいもやとうちずーかへるもろ
なきことをくちずさ記るのゝまへるあやしくあ
をれなるけーきうへる人ざまよていともはあげか
ゐさもうあれと云いわるやうまくけんさ

わゞおろさはふもねなありかーかたゝく袖をわ
れはゝおもやまゝらーけるをおすーんなるも
ゝ衣なりわゞ記くもあるかなかゞうなるもとに
記とゝおきくわゞかゝるまさる心をいうでうに
くべきゞと祈ろうちゞさる、

雑恋

（第末世ロイウ）
ぢんはまゝゞをゝゝば落ぬべき花のつゆ記るとゞ
きゝなんと見ゆゆ玉ざるれうへのあゝれなどは記ん
にあるゝなゞすきゞーさのこゝろおゝーくちゞさ

ろうめ。

門 四十二丁ウ

○人がれたをやぎたるばそよきんぞまもてくとゝた

きばおろけれどこちらしてさすがにそろべくもあるべく

空蟬書れ

さまちり 門 四十三丁ウ

○ちくしやいとすくしくんぞきなしとがちもひあがぞる。

夫伊勢物語

伊勢れうこのこれおもやられて。爰よやんゆんどろう

おうろくしくぞくまし。

京源氏

身れうさをなびくまあかであくる夜はうりかきねぞう

ねもなかれる。

弘ハさあ、爰ハなぞ

ちよ。ぞるされてぞまは

本のあも。いとなくう

けり。

門 四十九丁オ

○すぞうしくおやれがけもゝゑとまれるたつなぐうた

きさうふもまきらつけすくば。ゆしうもやあくま

しくもゝゑてちもゝもちうぬかゝまみけつもゝうよか

どちうぬやうよ。ほ氏のえ おがひらむとんなぐうもむもい

たくさすぐる

き 源氏七十ウ

○女はさうわすれもあをうれきにちもゝなゝとあや

しく爰れやうなうこをゝんにうくすりなきうろにて。

んとけうるいぶにねうまびなんゝむうはながめうハね

ざめぐちなれば。まなうぬこれめもいとなくなげーき

に、碁 彩猫荻と
にさいうちけるさこさ。さうゑむにこなることにといまあるく。
うちかゝゝゝむて詠るなり。
五紫女十二オ
○なるごとそうはさ、芳之はれ人のあるねにいもれ一まゝ。吾ム
はあまりけゝゝゝぬすさゑよかくうゝゝられをるゑ
かゝと、ちイゞゝる、
ワ十七ウ
○しまうらさわぎていうゝう蛙ゝきにもなるゑちら
ぬ。源氏ゑちつゆゆえれ
ワつゝをえあひてなり
賢木廿五オ
○ゆかゝちも。院ゑいとうゝにてまちりあむて。今
すゝゝなまゝゝきけうゑむてなけゝゝうなごやうゑ

うおりゝきしかゝゝこにあちれを見ちゑあゆかんれ衣
はかゝともなかたゝぬさまゝきさゝしめゝ雪を郭ゞ
らんすゝとうもあれどなるかゝ今ゝゞめゝうゝとなう
ばゝうあゝめ。あゝうゝあゝけうゝとなれゞさもさいゝう
かはさんゑにげなるまゝきゝ人へれあをもなりかゝ
ゆゝゞ坂ゞゝなゝゝてゞゞあさせあゝざりけり。
須ナ廿二ウ
○道すゞゝ。面かゞゝげゑ法とうゝむてゞむきもあゝがりな
カ
ゝゝゞ。母にのりあゝむね。
ロ廿五オ
○二条院はきゝは。ゝれまゝゑ。ちきもあゞうゝゝゝゞゝ。さ

せぬさまるおぢーこがしがさみ女人こもらーらわ
ゑ作ーんがさうもあつもてなしあ琴調度
ゆくもゑさなしあゑ琴ぬぎすてゆつるゆうれ自ゑ
などようつけてもいまと世よなくなりたるむ人ぬうる
ゆくおぢーたれいかつハゆくーうえ仮納言ハ俗称ハ
いのりはおとるゑ南ゆ。

○さくぬかゆとのあゑ面うげれげるゑまう
ゑあつるもかゑなしーゆ出うゆあゑかるうねあひー
まき相なとを見ぬよもむぬのこるかりてゑ

○日十一

稲彦云行ゆとひろ
ゆうう万系ゆるこ
こにけそびばもう
寄別ゆあべーと
いかう。

○ゆ世（ヨウ）る面かげるおがてただへかとくゆもゑ出ゑ
ゆへば。ゆゑゆゑてやむかへまーとおがて。

○世（セイヨウ）なるうあるつゆてもあちさなきかれなりゆ
れとゆもゑあるまいゑさくせよあゆむもよとんさる
にゆもいぬさもなうなむよいぐゆがさるべきちさかう
ゆくれ別ゆゆもゑおときれんうあるけれいけるうる
とゆげるうるぬ人ゆいゑゆきゆむをいとなけーき
ゆさまるてもれをまとにゑとゆうゆるてのるまい
するるつけてかるくとこやれいげれべさりやづよれ

おつかいろとのゐもとに。
四五 四十二ページ
○女こゝもかひなさもなるよ。おがーすてきゝのちゝれ
ーうゐがさうるんかー。
四 四十四ページ
○いゝとうつくしげなねゞこゝとれ。ゐりてゞもれよおもゝこゝの
ゐどるよゐこゝろせかゐにくーはすこーへゞしたこゝも。
いゝこーうめでたきこゝ。いまハかくて。ゐろへさゐ。かしこゐ。
こゝろおちかるにつけてはまこゝかはあゐまわるー
人のゝもへ。ゐーさまゝぐるこゝう。ちゐゞーやらゐ。
標漆 十六ページ
○うちかへーゑゐこゝつゝ。おゝしとなゞやゐよゝこゝろゞこちゝ

たまよゝを。女ぎこゝちゐあゐゐおこゝせてゝ。ゝこゝうゝもちにゝお
くゝ。ゐはゝと。おのゝゝゐやゐよゝこゝちゐりゞこちゐなゐあゐよゝをゝまこゝと
はゝかくゝまでゝとゐりなゝーあゐよゝまゝをゝゞかゝゝゐりはあゐゝゐ。
やゝ。ゐはゝきまなゝどゐうちゝおゝこゝゐやゐゝとゝきゝくゝきゝーかゝゐはゝと。
わゝすゝれゝゞかゝゝきゝこゝゐりゞゝとゝゝをゝゞこゝうゝこゝゐきゝてゝすゝぐゝいゝたゝま
ゝこゝひゝなゝと。ゐゝ。ゝこゝゐゝきゝこゝてゝゐゝこゝてゝ。ゐゝさゝゞゝこゝはゝりゝゝゞ。こゝを
ゝたゝくゝまゝこゝをゝすゝゞよゝなゝゞどゝゐゝゐゝのゝゐゝゞゝゞゝやゝゝゞこゝゞ
なゝゝさゝ人ゝへゝくゝるゝゝゝ

ちうづれくれば、かれがうこれきんをかきたるこん
をうれいらーうちあけむがとければ、人をかれくるかと
にうちとけて、すきくこをこそ、松風ちうなく、記ぐ
きあるもらり。
○月（十六ウ）はあっきよかつりすぎ、おりし、花をあづりいで
らうこそりすぐさびかれきんれがとをしゆうこと
はうとなく、掛こ衣なるよ、ゑあけむ、あいでかさなし
なんまぐちうべも、かつうべ、記きかつうれをうべいまの
こうちしまの。

伊氏文
ちきりしにかうぬこれちうべにてたこぬこうれか
とはちうきや、女
（四ウ）かつしどちぎりしてをたのまてれれ記ぐきよぬをう
へしいかな、
（十八ウ）
○ちめぐたまへぐ、いぐうちうぐをうとなうむ。
伊氏広河
あやーくれいかなしぬが、ををうろうぐうろうえがとけ
しぐとてけぐーをうきやをけくいとかーとちがーうを
さまも、為よかくまかーきがあうをなり。
少女（十八ウ）
○いちく文なとをもかよんをれがきなめうとうあい

ゆきなげかしゝもはまのりなどゝ（どゝ）にはまのりでぬるゝ
ゐるやうなれど。人も空にて人ゐ（ゐ）まるゐるなるさまとゝけ
とゝ。れいはゐとにさゝかしめなどもせぬをゝとさゝて人ゐ分を
もせびゝいとさゝろぼろくゐ泥てさうじにすかくさてゐる
まゝるて。女ゐもめをさまゝて。風の吉れ竹に猫とゝ。
うちろうよめくに。雁れ泥わるゝゐれば。ほのゐにきゝゐゐに。
をさなさゝちにもせかくおぼゝえぐゝにやきゐのひかり
もわがゐとゐ。とゝとりごちゐの人とゝ。わかゐゐゐたび
なゝいゝゐゐもとなけれ。（ゝ書四）おけゝ世たまへ。小行後

ゝゝ泥とのゝまゝ（ゐ）ゐ。ゐとゝ世ゐ。ゐのとゝなゝ。独
ゝとをゐのゐ泥けるゐ。ゐゐ世ゐゐゐゐゐ。
いれゐゐゐゐ。ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ。
とたちなゐ。ちかくゝて。ゐゐゐゐゐゐゐゐ。
かゝゝゐゐゐ。
（ゐ書）さ泥なゐゐ友ゐ。ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ。
ゐ泥ゐと風。ゐにゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ。
まゐにかゐて。ゐけゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ。
ゐゐゐとゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ。

和歌八十ウ　心なとのさまく

○あらきよけさやかなる髪はかゝるのすゝきゝゝかなるやどにうすゝきよけるもゝとゝなきあゝゝこうむて、なれうけれがあたゝゝきまれだきわかれゝやとは、つまゝけれどきなるゝまるる記ねなれいちがゝことなりかゝとかゝぐくんおきておやはゝみれやとゞきはまゝてめぎきゝがるゝとくあり、

等方三十オ

○ゝとゝまゝゝてかゝゝゝるゝゝゝ

雑滝五十ウ

○かゝゝそいでゝとやおもむうけむゝらまれをれの、つゝおもゝろきともおきゝけるとゝまれつまゝゝき

ゝこれてあれもがゝゝむずべきの名はあるけゝをてゝなゝてもゆゝきでゝもたまゝれいうゝこゝよおもむとゝうゝでとゝゝゝゝ袖をゝきうゝぶかゝ、

多秀元

ちゝなゝ

雑秋

おゝてやけゝて蓋ゝゝうまあゝれはかけゝ

かゝとばゝうゝも、

ハ七十ウ

○なゝゝくゝてもうゝちゝゝでゝけるかゝをくゝらをゝきゝるつゝけゝてもかゝれ今すゝゝ身ゝゝてゝおがゝゝゝけゝを、

かばゝうゝれるのゝゝゝてもかゝれゝるゝけゝあゝをゝゝるゝ

なゝむついでゝゝきゝゝむとやすゝゝゝでおゝもゝけゝゝ

梅枝 廿二丁オ

○いうよぎまーぴかやかさこのでーけーきととろまー
なるがーごかぎりーこぐしかてたちるむめうなごうもやうては
しちうなごあ白ーあやーしーふおれてもすーこいぐ
けうなこぐかかおいうるおかーつーむなどうろけるぶお
もむのるまうるかどにかーつーあうーさすーるうる月白ー
あまやうして、

夕霧左

つれなきくらきゆうけわすれぬ人
や訪ようあわなるとあり、寄きばうもかすあつ
れなきよと云むづゆすいうひれど

きかて
かぎりとてわすれがきけわすくもおやうなむ
くんなうんとあるけ、あやーとうちおれずがーこぐき
けーくんねもつるとうこ、
夕霧廿二丁オ
○われ女なーばなーどーうーかーなうとも、かーこーびーむを
むーうーなまーわかーうーこーわきなーぐーきおむおーぐし
ーまーて女氏あーぎむれむいーとあーくわーうーや。
をのーるまハせて。かーふんおうちにかむれ者ればーともお
ぐーーーーーーーーー、
口 百三丁オ
○わりかきあうちれなーぐーきあるぬこーとーまーひきーうをーく、

かきいだきたれば、いかがうばーこてらうたげなるうち
なくもなきくーくあまむこうへらうこぐすきぐくき
や。

（源氏下六丁オ　れたのこと）

○つ初よこれを見るとて、我もあうちかくふせみ、
あゆこてば、弱これうづさ消てなでやーかを弱ゆ。
人げをわかりこうるもいとうくなれてゆもすれば
きあはすうにまれたれうつむけくとまあやかな
うつくーとおもへどいとくなどあそちちかくうう巳
まへうきてわうくといやらうたげなるけいうきな

でうたてもすむかなでやく多まる。

（柏木六　ものわづらへばかとをるかなーせがれなるかてなく
弱かうるむあれもむかしはもちぎうるやとかやを見はく
のうまへいまくらうたげなくとをうろにいれてな
があるあり。

（口　六十三丁ウ）

○陵にもいまへうでかい見てきすむかなーくあく
うやうくてうとをうきなげなきあうをいとかうーげ
なくあいれを見てまけうく記とれ仏洞とうへのご
人袖はいわぐ家はけきれまうる。

柳木の文字を見て、女子文のうるとと漢武志の秘ばことを

○八十五オ
○かくばかりまことなきさまをよそなれ、ゑ、てうちく
れんさ、ゑくかるこうきるものをそうくかるべけかきれ
に、おもはぐくまんこをとをきてかゝることをきゝにを
ぐむあじとつまうつきせられおこかぐきこゆ
きとたゞすなやに、おかやけきまれんどへばかりにて、
文法ゝへれやども、拘すきまゞきるんざ、ぬうきわ
たくれぬきこるたなむきおけゝゞ表現せくし。
見すぐかゞきをれいゝくもものむうあどんな
んかゝむうむんなゝむいなゞけゝかゝねすら

○四十六

なれどうかとあうやわが身なゝもさいうれ人よ。
ムわけあゝぐくいおがゝぬをゝいとんぼきなゆれ
ぬ。まゝけゝさるいたすべきことにもあゝびなとおゞ
しみだゝにつけて、故法れうへもかくばんよいきろ
めてやもゝひがかをけくゝせあをけむ思へいう
れ世のことゝいとおろゝくあるまゞきあわ
まちなりけれとちかきたれ、れおゞ貪まゝおむ
れ山法いえもゞくくまゞきばんまゞをけか。
柏木六十オ
○かけ文見へなるれたをるおがゝうねゝう

なをむとうけむ女はらとやうこそ泳はさるぶぢ
にうをむるなぶハいとい〜き身もをきかへやむと
なくこうなるねへけれ。
ロウ
。ゆうきあやまちもなきるこあいせをまうしゆべ
はわどうやがてかきだうまぶむるあにしむ
むの身にもかてこ武なりてし紙かれ流のうちる。
あくかれありかいむすだもあめへよなふいとよわ
げよかれやうなるさきしてなきこわこむこかこう
むるよ。

ロ（ロ十二ウ）
。かこいはとかへでふたものうげよわうやなる女
して枝さこかいしたるをいつなる幣ふるすふあへ
るたのもしさよなどはくこまむてちはむやるさし
ようて。
夕霧云
おとせなくぶなしこれ枝よなるきなん紫ちはろこの
ゆるあるきとみすはやのへだてあるかどこそう
らあけれとてなげるようぬるあ了。
ロ（ロ十三ウ）
。かこちぶいやまにいえもはしなみきはけれどと
こぐるうかこいうきかどよあ武いかぶて

見るめよりうつくしう人がらもおもたゝかにあさましきまでさかしだてる
人をもまゝにさすべきさまのまゝやたゞんじせのこゝろ
いとをもてゆるむまじきやむごとなかるべけれどおかす
タ素　六十七ウ
○こゝろをすぐるかどにぞいとかつもてまゐるを
かくまいにもあるべきやうにぬしがせこにも
えみをとこをまことおかとなげちからをやうをせてん
ゐふ女をもいとたゞにたゞるやうにおもはれどいとくるし
け給をてさこゝろをとりてぞこゝろをとりあつかひ
ハ　六十二ウ　タ素河　云のるん
○げにようやうにすらにてこゝろ人はいとあるもこゝに

かゝるこゝちにもこゝろをかとなやらるゝ時りけれとも
をやるゝはすてゝあり。
ロ　六十五ウ　タ素河
○かくこゝろをきなげるまゝにたらなるまゝにはいとや
あなれてまゝはいとこゝろをくもあるべきたう
にこゝろかくしきけ給へるやうにたもちまこゝに
なるまゝはなるをいとゞとおもふこゝろをもひね
まゝもおなんんにはよくきけばあいさやうなん
すてゝおもむきこゝろのこゝまゝ
ロ　十五ウ
○中将はこゝろのこゝまゝ

ゆこおりて丸ゐ
て、おきあがりたり。はるつきはなやうなるに
かゝもてかくして。すゝぬくたゝせるかみけかゝを
なびいとおゝしげなり。紅はさゝたるけうそる
たゝまくわんざうのいろ氏記とへいとときよ記いろよ
くろきなびそうるはゝうべかさなりてもかゝきぬ
もぬきすべたりけるをかゝ記きかけなどするよ
あかをとゝゝるおきたりけるをゝりあ記てい
にはゝやおれ名ゝうわすれなけれとのまへば

中納言
さもゝろゝうべれあるにこゝろあけれかゝ
名さへわすゝゝるもゝ記てゆゝゝるゆゝ
しくて。

伊氏記
おゝゝゝゝおもむすゝゝ世なれなもあゝ記ゝ
やはゝゝおゝゝゝべきなど記とはゝゝはゝ
けゝきなゝ。

竹川廿三ヶ
。かれ乃基れげんゝをゝゆゝ基れをゝ記いで
さゝかゝれゆゝをゝゝゝまゝ見てゝかなゝあれなゝを
たのゝにてゝきたんかゝきゝゆゝゝものゝゝゝ

くなりぬるいとをしかはゆしばしばかたらきもあらんれとてとうまゝ
ものとなりけれとまめやかにもてなしの
○さてもまけのむこうといかにかくしう
おつゝよめをとりてめくいとせまゝかはたなりう
まもめをなぶのむて
（兄人かわ）いでやなどかすゝ女房にかなとぬしへまゝで
むこうなりけり
（椎本卅三ウゴ）○さきくのゝ
ゆくすゑもまさりてうしきたるかさゝまなどゆい

○五十二

ぼれていづまとかむとうちもあらびけるむこつ
ゆくゝにも地やとはいかもねいまはそとておきおいま
しまくのむするかどのむさくきいろぞりゆ
んにもむとなるむとおまへなる人くさゝめさき
ゝてにくゝゝ
（日）○うちゆくぐもあるねもたうなそうげ
あいぎやうつきくもゝくまなどゝめの
なくびくろくろいとおもむくくるとはるた
（絵角十四ウ）○元かりかんてはるかゝはゝをゆけるむ

てうれおいれなるとともつゆとに見ゆる女もすこ
しねぎりいでまつるよりとなりきのきれをきな
れいたのみれつゆもやうくこむかりみくゆく
。をとことい（六十三丁オ）ふもれいそうごとをとうしとすなれ
忘をねこと紙はもこむかるよりなすとれ繁も
かかるもれをとうばさこをかずなるぬ女たるれむ
かしものがるれのをこ
（宿木廿九丁ウ）。なをくうあいぎやうつきたるかるいれ
らぶ人いあじかるとこむなどるなきまるくゆ

かしきかるれるうるいるれたちうこむのるい御
はいるうぎれ如るかるあるぬなりかし
。（廿丁オ）日ぐるもいかてかくこむけりと見て年ぐしは
よろぼるおもむきぐるいたるれきぐるおも
こむあつむるこるおかれいきれるこもえとてかくき
きぬるやさおれうめていとみてもえたれるこむぬ
をぬれいいるをづかくわむくしとこむこていをく
うむきこへいるこむてこきむけあこをきくさこゆる
まるるあれなるれのりきまこ見たるれなか

へだてるがごとくなりけれども
すハ。ゑしやのどよりおがみたるかとて。わづか
袖して。涙をのごゐまへ。ごれ云月 おまのんがうる
のゆるつけて。はうれ待りぬもとて。すを
かくゐ。
ロ十六日
○人ゐれすゐ。
ろぢうゐいるうをられてなるかなるぢうもれ。
いわぐいかいしうへまつる。あまりおどろくしき
まであるまで。すうあれあるぢとてなしあるう

ぢうが。なるぶくさへたとへんかくなくめでくし。
ロ五十八日
○げよたれもちをせれ。松なるぬるれやもよいと
んぐるーう。ゐれかれかれかれるる人むさかむも
ちくまれすかるいうさすらとれうそうとく
むれむうるうるうるるる

六十二オウ中六行
○えとがくれたいでよいとあやーく。ふむうるさ
さやうう。ふむいでゐれかとのこまかけをふむすと
しなたうきもいとうれくあいれまて何ごとにを
いまるよ本丁れもこうるれらるれいとうる
さくふむむかくるれどいうきまにてかくるんをやめて
なくかるあくむをふはきれちれんれもん
おとれあいなくてさりけかくもてなくあつう
○あきたるさ巳を今すこ中あけて屏風れ
たまうのうきあるるをいれもかけすれい

きれるるれれる人はやあくむとふむておきあが
つるるやうたいいれ地うれ見ゆるれ例れがこころ
ハすくこ夜ハてきぬれすうれ人ふむてこなるれ
さうじハむきたてあむて屏風れさるるあむを
ぬあやーと山むて。あがれさくかくて見かつたる
さまいとおうしあがぎをたせかくうさくあむて
自六月
たれて。なれうくゆうしけれとのすさむくつけ
くなうぬさうもくつるかをかるぎまるもてか
くーていとくうあれさあれいしなくなくれ

のもしるしもなむ大ねやかうばしきけはひなども物もむわしさるにいとたぐひなくせんかなと

はゝ井ヒウ

○女いとそはくなりむとすんとうとさんとたぐひくおうろしきるあのなごちなるしるとはがのうさまうちふるいてるるにまさきはへなんてあるむをふむやるなんいうしうきわれいとうんうるむをもこなふるかとうぬべきうちなんするはのあるしをけるうれちはんぐるとていつくにもく例はあうきまなるて寺法などさわ

ぐなるはなどまさいうるきてはがさんとおもふもいはくるるおはんもるとかをむとるんあくなまめしきさまてむさしかりけるかはれおうろうなとはあるもとおかかるず意しかなとありたるねどあるにあむはんあくるるさはまるはかはるるうちのあへるいうくいあるよいまさりていとんあをむとはふむぬべきさまはちあへるへかるうんなるかるへはるるもはなてゆくするはなるくむとはたのくあべきんむへなるこるなくまさりあへるふをずなる

さまれらるゝ。なども是さうぞたゝむときなれ
ばなるべし。いとくるうあべけれあやしうゝたゝん
もなうおかしいゝくゝ人をゝ衣とおもふもうれい
ゆあるまじくかろきことがおれ人まうしとゝ心
ハれてわすれぬ元なんがうさいとふうちゝね
べけれバおもむこだれるけしきを月ごろよこま
なうゆめこゝろちりねぬまさりにけりつれく
かふすうれおどこおもむのこすとゝあじかし
と見あるもんぐるけれつゝもうもゝろとゞめ

てかゝゝむあるはたくゝすりにやうゝくるろちうなし
くけり。一日なん乃しかゝくるハけちかきあるを花
も見あるをたべしこ余れ元もちうきうどとなりあ
けくれおかたなきへだてもおれぞうあるまゞ
きゝれおれまのかゞるゆさりねべくハわしてんと思
ゝてのあるもかれ人のはどうなるべきゝろ元
まうけうりゆきけるものあつうしをかゝるとも元
らでさおかすむとゝ衣なゝゝもうなゝるゝ元
くべきるハあゝずうしとふるうゝるあうしさまれ

おもかげよ。おぼゆれば。われなぐさもうたてころう
れこやとふをつげてなさぬ。
□世二十ウ
。男ハすぎにうるぬ紅をもおぼゐいで女ハいきよ
ひとうえをうえうえ身ぬうきをなげきくをへてかくこに。
もれおもハし。
□世二十ウ
。女ハかきあつめるこころぬうちにもよかさく
涙ともすれバいでたつをなぐさめつゝあむつ。
芸云
ゆう治ちぬなぐきちぎりハくちせゞをあやおむ
かくをんさわぐなゝいまゐあむてんとのよ。

仕方云
たゞまめ〳〵世ハいあやうきうぢはを打せぬもぬて
なるかをれめとや。
□ロ十十ウ
。けしハこだれるかゞすこ世ゞをくさきくぬよ紅
梅ぬ切りものなゞあを世しくきかへてねゝつ。
伝説もあやしきあむゝさたゝしゞあゞやゞるれ
ばゞるれもぬ世ゝるあむて。花にきせあむてだてうゞ
まゝ〳〵せあよ。姫ぬよあしをきりたゞいうき
もゝをあをあむてんゝゞとやむゞとなきくハぬ人
おかかしゞとうゞかりぬさまたるハかくやとゐさまふ

かくさはなるまで。あるうどもたいふしはたくしもあ。
口十一丁オ
○ちはやぶるで。ねくかくてもむとぶかへすぐのあふ。
うれわどかの人はあ見たらぶといふきとどもぶ。
ちかとせはへばいかうなきとと心をてくへもや
らび。洞さへおはるを色さくるあはまへにるふ
むうはたねなあうとはまいうはやがさるうこ
てもなきてもよろばるのあむあうて。板あく。
ねくかつりあふ。
口十二丁ウ
○あなどちなる人はれはとはおもむいばるは恨

たくちまれ。はやの
かつまれ。こ況を
小樽はくはし

こあ記しさまのあむしとぶも。面かげはとうむ
ていさくうまとつめが。夏に見てあむつくいとうたく
あるまでおかゆ。
口十三丁オ
○あめのりやまで日ごろおやくなるはいはるやま
ぢおがたくわりなくおがされをばおやめふ
さいハ。伝せきもはまうとおがすもがくるけなし。
はきせねおとどもかさあむて。
白天
なるあやるうなるはきもはてはまでおさへくる
うれわはるさふでまるをてかさみるうあへ

ゑもゝ見ゆるあり。

○さいくまゝ（ロ十三ウ）

かりけるを見けるに。ゆめにれば。伝伝右をこあい
せくなりうけるよけりといをぬやうよてゝ。
つゞかし。殿ばかりたぐゑおいしまさぐ
見しいかとさればあるさまいうかりけりうちこだ
れ白つるあいぎやうよまろなゝかりばいろ
見るくえかくてあゞきさいれえにもまゆるく
けるまゝ見てまけりてんといふ。右をうゝ

（右を羽）

ばれんばれども。殿ばありさまきまさりゆゝ人も
なれるあゝむかさちなどいもゝびばはゝろどへ字
を元などよなかさばをはいとこぐゑきわざろ
なゝいぐなゝせあいんとすむとゝうゝてかゝら。
○ゑばれろきゑつゝ絵をときぐ見てなろれけり。（ロ十ロウ）
なぐゝへてあるまぐきとぐゆゝとざまかうざまに。
おもゑなせぐゆゝにきてこもとてやこなんいと
ゑゝおがゆべし。
○さりゆゝも。ゑゝとゑゝむかゝと笑ゝやるも。（ロ十五ウ）

もれぬ水をてゐるてゝむさまはこゝろもとけよるてゝ
よまあるをとゝはゞどゝるゝ足あるをたゝくゝ衣ゝるなどゝむ
らむとゝ始もをやゝるをやゝていと寒ゝ。
口六十八十オ
○文ハ四ゝるにてすゝゝとほくたゝちゝるゝさゝゞむ
たゝゝゝゝたゝゝゝ犬ともれいできてゝゝくゝゝもいと
おゝゝくゝをとずくなゝゝいとあやゝきゞあゝきな
れゞはずゝゝなゝゝむもゝくゝゝ足いてきたゝゝむもいゝ
さまふゝゝさゝゝあゝゝ枝かゞゝんをゝまゞゝゝゝる
口上
○ゝるにのをんとすれゞをゝゝゝきかゞゝゞきねゝすゝ

をゝゝてゝたちゝゝをゝてゝゆくゝわゞくゝをはゝをせてゝこゝゝ
らハゝをもなゝゝ人ゝゝあゝゝきもゝゝをはきたゝゝまゝ
足てゝかくゝなんときこゝゝれゞかゝゝゝゝむゝゝふゞゝきゝゝゝゝだゝ
ふゝけれゞはゝゝやまゞゝゝのゝゝきゝゝゝれゝゝおゞゝゝゝむゞゝゝれゝゝけゝ
障泥
あゝゝゝとゝゝゝあゝをゝきてゝおゝゝゝゝるゝゝわゞゝゝゝゝくゝち
にもゝあゝゝきゝあゝゝきまゝなゝゝゝゝるゝゝちゝにゝゝゝゝなゝは
れてゝゝゝくゝゝくゝゝは。えあゝゝきゞゝきゝ身ゝゝあゝゝゝと。衣
ゝゝゝゝゝくゝゝゝゝなゝゝきゝゝゝゝとゝゝゝゝゝゝゝゝんゝゝゝゝゝきゝを
ハゝゝゝてゝゝゝゝゝゝくゝゝゝゝゝゝゝゝ

きあらば。おにくつくりたるとも。おろるる見すたきま
じき人もあり。
○六十九オウ
○六十二
○六十九オウ
○六十九オウ
○六十九オウ

いたんなどおがすまいまぢおどろかされてさぞ
涙ぐつゝこゝゐ乞てゐ拘もいとれず太を行どちかく
あいとてかくばくもの分おがせばもれぶるゑとれ
ゑ〜ゑいあくがるなるもれなれば沙あもさわぐ〜
きなゝむかしいづくとおぶ〜さぐきまりてゐるも
いろにもおりまさなんやうちなげくゐへるきぬ
とかゆよ井あてゐ〜ゐつをなん。
（結歌十七ウ）
○いうくもおがたりたるかなどいろなりけれ
ば。さすがよたるきんれすくせなりけりたゞれこ

かぶれ石のさばかりかゝづきをりあるこさいかゝう
たちよりはゞめてたゞいまれ世にいたゞくをおいせ
ざめり。足ゐ人とてもなれあなゝ侍さまくまつ
けてうぎりなきゝ人をおきておれるがんをつくし。
ふれ記とたちさわぎてずはが紙まけりゝへ
ゆくゝちくゝさわぐいれれ人をおがしゆかれれば
おゝちれあやまりにゝうゐありゆれ吾もかばゝう
れ身にてゆくきれゝかとのれむすあをもちたてま
けりなゞゝさいれ人れらゝたくおがゆゝかゝいおと

まやいてけるまゝ今ハとおぢゆるにハんゆのぜ
めんかとなくもあるかなさるハをさなりかくらゞと
ゝふもあはれとさまくにおもむこゝろ（こゝろ素の内）なくて人本石
にあるゝざしハ皆情あるとうちずゝてゆきつゝ
ロ（ハ十オ）○交をあぢゝしくあつれと忘むきてもわぢ
をさすにおろうるハおもハざりけるわぢよいとあ
きゝもるゝなくゝとなげなりしさろにてさのゝ
ぢのちきゝはたりたるくかくおもむるなりけん
かゝわづらにさゝはなちすゑざゝまかいしし

世の中はうきたゞ
おぢゝ身をなけハ
ゝ

う き世にゆともいうでゝかなゝゝ山ゝ谷とも求ゆ
いでまゝというゝきあはちきりかなとしゝのう
ゆきまうおぢさるゝおをいはくあゝし。
此ふゝ雷部は鼓をまうゝゝの凡俗に橋本氏の
ゆゝわれゆゝたゝゝまゝたゝゝゝゝゝゝ
ゝんゝゝゝ野ゝゝゝゝゝゝゝ
人ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
亮澄ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
校合ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

下の書くの段余ハ孔石侯氏の自ら考へ

蔡塘 釋 敷誠

紫文裳錦書三畢

第三